

視点3

デンマークの「森の幼稚園」を訪れて

中村 紘子

(大学院生)

二〇一四年夏の二週間、デンマークの「森の幼稚園」を訪れる機会に恵まれました。今回訪れたのは首都コペンハーゲンから車で三十分のガンルースの森を拠点とする私立の認可ステインルース森の幼稚園。森の広さは、約一六〇ヘクタール（東京ドーム34個分）。主にカシの木やトチノキなどの落葉樹から成る森ですが、湖が隣接していたり、昔スウェーデンから流れてきたといわれる大きな岩盤が森の中の一角にあったりと、多様な環境を備えています。森の幼稚園の中には、直接森の入り口に毎朝集合するところもありますが、

バスを所有するこの園は、市内の三か所のバス停で子どもたちを乗せながら、毎日森へと向かいます。二歳十一か月から六歳までの二十四人の子どもたちと、有資格四名・無資格一名の保育者が交代制で毎日三人、九時から午後二時半まで森の中で一緒に過ごします。

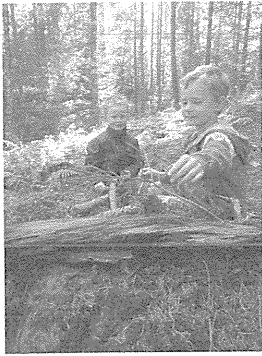
小さな森の案内人

森の入り口にバスが到着すると、子どもたちはリュックサックを背負い、朝の軽食をとる森の中の小さな東屋^{あずまや}まで歩きます。軽食はそれぞれ持参した果物や野菜、ナッツなど。

中村 紘子（なかむらひろこ）
お茶の水女子大学大学院前期課程在学。

食べ終わった子どもたちから、落ちている小枝を拾い集めたり、木漏れ日とたわむれたり、倒木の上を渡り歩いたり、思い思いに遊び始めます。

東屋の周辺の少し開けた場所でゆっくり過ごす日もあれば、湖や岩、木登りに絶好な木、滑り台ができる倒木など、みんなで目指す場所を決めて移動しながら過ごすこともありま
す。行き先や道順は、季節や天候を考慮しながら前日や当日に子どもたちと保育者で決めますが、鳥の声や動物の足跡に導かれ、柔軟に変更することもありました。列に並んだり先頭を決めたりして移動することはありません。



ん。ただし、分かれ道や、「待ち合わせの石」と呼ばれる目印の石の所に来ると

必ず全員を待つことになっています。

「待ち合わせの石」にはじまり、子どもたちは森の中のさまざまな物を紹介してくれました。「トロールのたんこぶ」と呼ばれる木のこぶ、「トロールのおしっこ」と呼ばれる岩の上の大きな水たまり、二股に分かれた幹の間を通ると願いがかなうといわれる「願い事の木」など、子どもたちの間で受け継がれてきた呼び名の数々を教えてくださいました。子どもたちは、自然の中のさまざまな現象を自分たちの言葉でとらえ、想像を膨らませながら語り、そのことを通して森との関係を深めているようでした。また、おのおのにお気に入りの場所を持ち、「これが私の隠れ家だよ」と招待してくれました。それは茂みの中だったり、木の幹の割れ目の間だったり、木の枝を組んで作った空間だったり……。日々過ごしている森を見せてくれる子どもたちはとても誇らしげで、まさに頼もしい森の案内人でした。

自分の頭や心を働かせるといふこと

できるだけ決まり事を作らないというのが、ステインルース森の幼稚園の方針です。森の中で、どこまで行つてよいのかということも、保育者が具体的に定めているわけではありません。「大人が見える場所、大人と呼ばれて聞こえる場所まで」というのが子どもたちの間で暗黙の了解となつているようでした。目に見える境界線がないからこそ、自分だけがどんどん離れていかないように、保育者や周りで一緒に遊ぶ仲間が存在を感じながら遊ぶことが求められていたように思います。それでは遊びに集中できないのでは、という疑問



も持ちましたが、広い森で自由に遊ぶということは、こうして自らの身を守る責任を伴つて遊ぶということなのでしょう。

また、子どもたちが葉や花をちぎったり、木の枝を折ったり、小さな虫をつぶしてしまつたり、見ていてどきつとするような場面もありました。けれども、保育者がそれらの行動をむやみに制限することはありませんでした。その分、子どもたち同士で「それはあんまりだ」と注意し合つたり、友達が虫のために時間をかけて小さなお墓を作っている姿を見て、自分がしてしまったことの大きさに気付いたりする姿がありました。

森での過ごし方を保育者があらかじめ決めてしまうのではなく、それぞれの子どもたちが自分の感覚を頼りに、そして仲間とそれをすり合わせながら、頭や心をしっかり働かせて判断をしていくことが大事にされているように感じました。

子どもたちの育ちを引き出しつづける森

森で過ごす間、保育者が子どもたちに積極的にかかわっていく様子はほとんど見られませんでした。移動前に集合する時や帰りの会では、保育者が子どもたちをまとめていることも多いのですが、その他の時間はコーヒールを片手に少し離れた所から子どもたちの様子を見ている姿が印象に残っています。あえて子どもたちと距離を置いているようにも見えました。その理由を保育者の一人に尋ねてみると、こんな言葉を教えてくださいました。

“borne skal kede sig.” 「バーンスキヤルキルサイ」

直訳すると、「子どもは退屈して過ごすべき」。ここに込められる意味は、「子どもたちの退屈な時間を保障することの大切さ」ということのようにです。常に大人が何かを与え、提案し続けるのではなく、子ども自身が森の

中で感じ、考える時間を大事にしたいという思いによる言葉です。しかし、決してただ遠巻きに見ているだけではありません。人の力ではどうにも変えられないこともよく起きる自然の中で、子どもたちが何に気付き、受け入れ、克服していくのか、ということを保育者たちは丁寧に見取っているようでした。

「さまざまな変化や多様な命に富んだ森が、子どもたちの育ちを引き出しつづけるのだ」と、森に尊敬と感謝の気持ちを抱き、保育の場としての特性を理解しながら自らの子どもたちとのかわり方を考える保育者たち。このような保育者の在り方から多くを学んだ二週間となりました。

